

The First Crusade and Persecutions of the Jews

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/414

第 1 回十字軍とユダヤ人迫害

－日常性と事件性との連関－

中 島 健 二

はじめに

この研究ノートは、第一回十字軍の途中に起きた北フランスとドイツ・ライン川流域のユダヤ人迫害を調べたものである。ポイントは、誰が、どのような状況を背景として、何をきっかけとして、それを行ったのかというところにある。考察はつぎのような方法論的な関心にもとづいている。

キリスト教社会からのユダヤ人の排除の仕組みを考察するということは、まず、キリスト教徒とユダヤ人の日常的な交流（そこに親近と疎隔の感情が入り交じっている）をとらえるにあたって、どの階層がどのような反ユダヤ主義の動機をそこで育てていったのかをあきらかにすること、つぎに、個々の迫害事件を検証するにあたって、どの階層のいかなる反ユダヤ主義的な動機がそこに作用したのかをあきらかにすること、そしてこれらの作業を通じて、反ユダヤ主義のいわば日常性と事件性との連関構造をあきらかにすることではなければならない。第一回十字軍のときに起きたユダヤ人の迫害事件の背後にはどのような状況が横たわっていたのか【日常性】、この事件のきっかけとなったのは何であったのか【事件性】、それらはどのように連関しているのか。

第 1 節 ウルバヌス 2 世のアピール

第一回十字軍は、1095年11月のクレルモン公会議における教皇ウルバヌス2世のアピールから始まった。そこで、この節では、クレルモンにおける教皇の演説の内容を確認しておく。といっても、教皇の演説については、公会議から数年から二十数年を経て記されたいくつかの年代記に依拠するしかなく、それ

らの内容には大きな食い違いがある。したがって、そこから引きだせるのは、あくまで教皇が十字軍を創設するにあたって意図したことの大きな近似値である点に留意しなければならない。

教皇はまず、聖地が侵略者の異教徒によって汚されたことへの激しい憤懣を聴衆にぶつけている。Robert of Rheimsの版によると、エルサレムの侵略者はキリスト教徒に割礼をほどこし、その血で祭壇を塗るなどの悪行をはたらいていると非難される⁹¹。しかし、注意しなければならないのは、非難されているのは侵略者のムスリムであり、同じく異教徒であり、エルサレムに住んでいるユダヤ人がそのなかに含まれていると明瞭に示すくだりはない。Baldric of Dolの版では、聖地が汚されたことに対する憤りが同じように語られているのだが、キリスト教の聖地としての観念を高めるために、新旧二つの聖書の故地を混然と引き合いに出している⁹²。もちろんこうした修辞は旧約聖書の民であるユダヤ人とその教えを正当化するものではないのだが、少なくともユダヤ人をムスリムの同胞として一括しようとする意図は感じられない。

つぎに注目されるのは「神の平和」の動機である。Robert of Rheimsの版では、教皇はキリスト教社会の内部で土地をめぐる諍いが激化しつつある状況を指摘し、土地の狭隘さを打開するために新たに土地を獲得することが必要であると説いたとされる⁹³。実際のところ留意しなければならないのは、当時は一般的に領主による領域的な支配がまだ固まっておらず、それと関連してであるが、騎士あるいは貴族という社会的な身分もまだ固定的な状況にはなかったということである。教皇はこうした不安定な状態を克服するには、教会がその導き手とならなければならないと考えた。もちろんこれは何よりもまず精神的な導きである。Fulcher of Chartresの年代記によると、クレルモン公会議で教皇は「教父たちが長い間うち立ててきた神の平和が更新されなければならない。人々は司教区でよくこれにしたがい、これを破る者は破門に処する」という勅令を出したとされる⁹⁴。これが「神の平和」であるが、さらに一歩進んで、領主あるいは領主たらんとする野心を抱く者たちの諍いの要因である土地を外部（聖地とその周辺）に求めることによって、キリスト教社会の内部に平和と団

結をもたらそうというのが、Robert of Rheimsによって描かれた教皇の意図であった。

もしそうだとすれば、John Franceが主張するように、ウルバヌス2世のアピールに対して社会の各階層が一斉に共鳴したとは考えがたい⁹⁾。何よりも教皇はキリスト教社会の戦士に向かってエルサレムの解放の戦いに発つように檄を飛ばしたのである。「キリストの戦士」(Militia Christi)の観念は、信仰のために靈的に戦う聖職者階級から文字どおり騎士階級へと変化をとげつつあった¹⁰⁾。教皇がクレルモン公会議の後にVallombrosaの修道士たちに宛てた手紙のなかで、聖地に発つのは騎士であり、世俗を捨てた靈的な戦いに身を捧げている者が武器を取り、この旅に加わることは望ましくないと釘を差したのが、この変化を明瞭に物語っている¹¹⁾。

しかし、教皇が誰に向かって十字軍の兵士になるように呼びかけたのかという点については、あいまいさは残る。Robert of Reimsの版で、教皇はつぎのように語っている。年老いた者、弱い者、武器を取れない者は行けない。女性は夫や兄弟などと一緒でなければ行けない。富める者は金に困った者を助け、その資産に応じて経験ある兵士を随行させなければならない。聖職者には司教の同意、俗人には司祭の祝福が必要である¹²⁾。これらの言葉を緩く解釈すると、条件しだいでは騎士以外の俗人も十字軍に加わることができたように思われる。実際に少なからぬ数の民衆(農民や市民)が十字軍にしたがって遠くエルサレムをめざしたことは否定できない。それに、騎士がまだ固定された階級ではなかったことを忘れてはいけない。

最後に「終末の到来」に触れておく。これはクレルモンでの演説を書き記した年代記のなかでも、Guibert de Nogentの版のみに見られるものであり、ウルバヌス2世が聴衆に向かって実際に終末論を説いたとは信じがたい¹³⁾。しかし、当時そうした雰囲気がかつてあったということを示唆するものであるかもしれない¹⁴⁾。その頃の終末論によると、キリスト教徒の「最後の皇帝」が信仰の敵を一掃し、エルサレムで戴冠するが、その後反キリストが立ち現れ、しばらく悪に満ちた統治を行う。反キリストを打倒するのは再臨したキリストであり、

そのもとで世界は最後の審判を迎えることとなる。もちろん終末論は個々のテキストごとに異同はあるが、おおむねこうしたシナリオに沿っている⁽¹¹⁾。Guibert de Nogentはこのような終末論にもとづいて、反キリストが到来するにはそれを迎え撃つキリスト教徒の勢力がエルサレムにいないと教皇に語らせる。そして、そこが今は異教徒の住みかとなっているのである。

ウルバヌス2世は騎士以外の広範な人々にも呼びかけるという含みを残しながらも、その核心には「キリストの戦士」である騎士を置き、彼らに向かって、異教徒からエルサレムを奪還する運動に決起するように促した。そこにはまた、ローマ・カトリック教会を導き手とする平和の招来と新しい土地の獲得という希望が込められていた。さらに、それは終末論的な雰囲気をともなうものであったかもしれない。いずれにしろ、そこには十字軍を反ユダヤ的な行動に駆り立てる要素は見あたらない。

第2節 北フランスのユダヤ人迫害事件

クレルモン公会議からそれほど多くの時を経ずして、北フランスを中心にユダヤ人に対する迫害が始まった。教皇にしてみると、いささか不本意な事態が勃発したといえるかもしれない。なぜこのようなことになったのだろうか。このときの迫害を記した史料は乏しいのだが、ここで当時の模様を再現してみよう。まず、作者不詳のユダヤ人年代記（いわゆるMainz Anonymous）の冒頭部分に、つぎのような内容の記述がある⁽¹²⁾。

神殿破壊から1028年[この場合、キリスト教暦1096年にあたる]、フランスの君侯と民衆(the noblemen and counts and the common people in the land of France)がエルサレムをめざして結集した。そのとき、彼らはたがいに言い合った。「われわれはイエス・キリストを信じない王国を征圧するために、遥かな土地をめざし、命を危険にさらそうとしている。しかるに、イエスを殺し、十字架にかけたのはユダヤ人ではないか」。彼らは怒りに駆られながら、ユダヤ人にキリスト教の信仰を受け容れるか、さ

もなければ乳児も含めて全員を抹殺すると宣言した。貴族も民衆も十字のシンボルを服に付け、特別な帽子をかぶっていた。フランスのユダヤ人はそれを知ると恐怖に駆られ、彼らの先祖の慣習 [贖罪、祈祷など] にすがった。また、彼らはライン川周辺のすべてのユダヤ人コミュニティに手紙を出し、自分たちと同様に警戒を怠らず、敵の手から救われるために神に祈るように促した⁽⁴³⁾。

フランスのユダヤ人となっているが、ライン川周辺のユダヤ人に手紙を送ったということから、これは北フランスのユダヤ人を指すものと考えられる。一説によると、この手紙が出されたのは1095年12月のことであった⁽⁴⁴⁾。また、手紙を受け取ったライン川周辺のユダヤ人が大規模な迫害に見舞われるのは1096年5月のことであるから、北フランスの事件が起き、手紙が出されたのが、それ以前であることは疑いを得ない。実際に、北フランスの十字軍は1095年12月から翌年の春までにエルサレムをめざして結集した、あるいはその準備に入った。第一に、隠修士ピエール(Pierre l'Ermite)の率いる十字軍、いわゆる「民衆十字軍」である。それは1096年3月頃に北フランスの地から出発した。第二に、大諸侯の率いる十字軍である。それは教皇の定めた日程にしたがって1096年の秋に各地から続々と出発するのであるが、準備は春から夏にかけて進められた。その準備に入った矢先のことであるとすると、Mainz Anonymousに記された迫害事件が大諸侯の十字軍にからんだものであったという可能性は否定できない。

なお、民衆十字軍の呼称は、それが軍事に長けていない民衆だけではなく、経験を積んだ多くの騎士階級を含んでいたことからすると的確ではない。Mainz Anonymousでは貴族、諸侯、一般の民衆が十字軍に集ったと記されており、どちらかというとそれは大諸侯の十字軍ではなく、民衆十字軍の実態により近いといえるかもしれない。

いずれにしろ、1095年11月のクレルモン公会議から遅くとも翌年の春までに、北フランスのユダヤ人は不穏な空気に包まれることとなった。十字軍はムスリ

ムを打倒するために参集したのであるが、「ムスリムという遠くの敵に対して、近くにはユダヤ人という敵がいる」、「ムスリムを打倒することが神の意思にかなうのならば、ユダヤ人を改宗させることも同様である」という動機がそこから芽生え、身近にいるユダヤ人にも攻撃の矛先を向けたのである。それは教皇のあずかり知らぬ事態であった。

もしMainz Anonymousに出てくる十字軍が民衆十字軍であったとすると、そこからつぎのような推測も成り立つ。3月に出発した民衆十字軍は進路を東にとり、進むにつれてドイツ人の軍団をも加えながら勢力を膨らませ、ライン川流域に達した。5月からライン川流域でユダヤ人の迫害を大規模に展開したのはこの民衆十字軍の一部であった。おそらく北フランスのユダヤ人は、彼らにとって非常に危険な勢力となりつつある民衆十字軍がラインラントに向かうことを察知して、その地の同胞にも警戒を促すために、手紙を送ったのであろう。

さて、キリスト教徒の側の史料としては、Guibert de Nogentの自伝 *De Vita Sua* が注目される。そのなかにつぎのようなくだりがある。

ある日のこと、ルーアン [ノルマンディの首都] で、十字軍の遠征に出かけようとした人々が口々に不平を鳴らし始めた。「われわれは遙かな隔たりを越え、東方にいる神の敵を攻撃することを欲している。しかるに、いまわれわれの眼前には、あらゆる種族のなかでも神の最悪の敵であるユダヤ人がいる。われわれのなすべきことは逆方向にもあるのだ」。そして、彼らは武器を手に取り、ユダヤ人を信仰の場 [シナゴグ] に集め、改宗を迫った。この条件を受け入れた者をのぞいて、ユダヤ人は老若男女の区別なく剣にかけられた⁽¹⁵⁾。

Mainz Anonymousにはフランスのユダヤ人が生命を奪われるほどの危険にさらされたとは記されていないのに対して、*De Vita Sua* ではルーアンのユダヤ人はもっと激しい危害を受けたことになっている。しかし、興味深いことに、ユダヤ人に対する攻撃の動機は非常に似通っている。*De Vita Sua* の話の力点は、

迫害のさなかに救出された後（誘拐といってもいいのだが）、ある貴族のもとでキリスト教徒として養育され、しまいにはFlyの聖ジェルミエ大修道院の修道士になり、ユダヤ教を論難するにまでいたったWilliam the Jewの半生伝におかれている⁽¹⁶⁾。作者Guibertとこの修道士との間には親交があった。全体的に反ユダヤ主義の色合いが濃く、その点で関心を引くのだが、話のさわりとして語られたルーアンの迫害事件の記述は短く、この迫害がいつ起きたのかということとは定かではない。

考えられるのは、やはり二つの十字軍である。第一に、それは民衆十字軍の準備中かあるいはその進発のときに起きた。第二に、ノルマンディの君主による十字軍の準備中かあるいはその進発のときに起きた。教皇のアピールを受けて、ノルマンディ公国では1096年の春から夏にかけて遠征の準備が進められた。聖地に向かうことになったのはウィリアム征服王の息子Robert Curthoseであった。ノルマンディ公の出兵は同年9月か10月のことであり、軍はイタリアに進路を取った。その出発を記録した他の史料には迫害事件の言及は見あたらないのだが、Robertの一軍が首都を出発する前後の気分の高揚が、上述したような動機から人々をユダヤ人に対する攻撃の行動に駆り立てたということはたしかにあり得る⁽¹⁷⁾。

いずれにしろ、*De Vita Sua* の話から分かることは、Mainz Anonymousの話よりも時間の幅が広く、民衆十字軍が準備に入った1095年末から君主の十字軍が出発する1096年の秋までのある時点で、ユダヤ人にく改宗か死かを迫る事件がルーアンで起きたということである。

このように、教皇の思惑を越えたところで、北フランスの十字軍には「イスラム教徒という遠くの敵=ユダヤ教徒という近くの敵」という敵対的な意識の連想がはたらいた。それはまさにanti-semitismであった。ユダヤ人にとっては、聖地の奪還をめざす十字軍運動の高揚が、思わず知らず自分たちに攻撃の矛先を向けてきたことに由来する精神的肉体的な恐怖は耐えがたかったであろう。しかし、それに加えて、ユダヤ人は大きな経済的な負担も背負いこまされることとなった。

Solomon bar Simsonの年代記には、つぎのような記述がある。物資の供給といえは聞こえはいいが、強請と紙一重であった。問題は十字軍が多大の糧秣を必要としていたというところにあるのではなく、それがキリスト教徒ではなく、ユダヤ人に科せられたというところにある。おそらく隠修士ピエールは北フランスを出発するにあたって、こうした行動をとったであろう。

隠修士ピエールが大勢の人間をともなってトリール(Trier)に現れたとき [1096年 4 月]、彼はフランスのユダヤ人の手紙を携えていた。そこにはつぎのように書かれていた。「われわれユダヤ人のいる地域にピエールが足を踏み入れたならば、かならず長旅に必要な物資の供給を受けてしかるべきである。そうすれば彼はわれわれについて親しく語るであろう。なぜなら、ピエールは聖職者であり、彼の言葉は人々に尊重されるからだ」⁽¹⁸⁾。

隠修士ピエールとはいかなる人物であったのか。Solomon bar Simsonの年代記にあるとおり、ピエールは人々に語りかける人物であった。彼は1050年頃、アミアンに生まれたといわれる。十字軍以前の経歴についてはわからないことが多いが、その名前からして11世紀の隠修士運動 (movement érémitique) を想起させる⁽¹⁹⁾。この時代、隠修士はたんに隠棲し、瞑想する宗教家をいうのではなく、修道院の枠に収まらない点ではそれまでの隠修士と同じだが、むしろ社会的な諸問題に敏感で、清貧を旨とし、聴衆を自らの周りに引きつける聖者のことを意味していた⁽²⁰⁾。北フランスでは11世紀の中頃からこのような隠修士の活動が目立ち始める。ピエールがそのような隠修士として、民衆に道德改革を説いて回っていた様子はGuibert de Nogentの年代記 (*Geste de Dieu par les Francs*) に活写されている。

君主たちが巨額の費用に直面し、慎重にかつ緩慢に準備を進めていたのに対して、資産も乏しく、数だけは膨れ上がった民衆は隠修士ピエー

ルなるものについて回り、彼があたかも主人(maitre)であるかのように彼に従った。ピエールは北フランスのどこかの修道院で孤独な生活を過ごした後、いかなる意図を持ってか、そうした隠遁(ermitage)をやめ、町から町へと説教して回るようになった。人々は彼の聖者であることを声高に叫ぶのだが、わたしはかつてこうした人物がいたかちよっと思いもよらない。ピエールは自身に喜捨されたものを惜しみなく貧者に与え、娼婦に嫁資金を与え、その仕事から足を洗わせた。彼は人々の諍いを見事な威厳のもとに納めた。その言動には神懸かったところがあり、人々は彼の衣服をはぎとり、聖遺物とした。それが正しいこととも思えないのだが、新奇さを求める民衆の好みには合っていた。彼は粗衣を身にまとい、裸足で歩いた⁽²¹⁾。

君主の十字軍と民衆十字軍との対比にも多少触れられているが、おもにここで叙述されているのはピエールの説教師としての活動であり（それをGuibertは皮肉を込めて語っている）、それがどのようにして十字軍運動へとつながっていったのかはここからは読みとれない。この点については、Guillaume de Tyreの叙述が注目される。そこにはつぎのようにある。

ピエールは十字軍に先立つある時期、信仰に駆られてエルサレムへ赴き、信頼の置ける案内役の話とその他の見聞から、現在の危難と彼らの祖先がずっと以前にこうむった迫害のことを知った。彼はエルサレム総大司教シメオンを訪ね、知遇を得、さらに多くのことを知った。総大司教はピエールにエルサレムに住むキリスト教徒に降りかかった害悪のすべてを語った。総大司教はローマ教皇にあてて、窮状を訴え、救出を要請する書簡をしたため、ピエールはそれを携えて、海路ローマに向かった。そして、そこで教皇ウルバヌスに接見し、彼に託された使命をみごとに果たした⁽²²⁾。

この話によると、教皇の十字軍創設を促したのはピエールであり、その意味で彼こそが十字軍の決定的な提唱者であるということになる。この話が純然たる伝説であるのかそれとも史実を反映したものであるのか、またそれと関連して、教皇が十字軍の一元的な起源であるのかどうかという論争は19世紀からあった。それは伝説であって、教皇のほかに十字軍の起源はないという説がなごらく有力であったが、最近になってこの定説を見直す研究も出されており、まだ決着を見ていないという状況にある⁽²³⁾。論争にここで立ち入る余裕はないが、少なくともつぎのことは確認しておかなければならない。すなわち、たとえ定説の通りであったとしても、ピエールにはこうした伝説が生まれるほどのカリスマ性があったことは否定できない。そして、それは説教師としての彼の卓越した能力に由来するものであった。また、かりに彼がクレルモン以前に十字軍の構想に関わることはなかったとしても、ピエールが教皇のアピールに即応し、驚くべき早さで十字軍を徴募したことの背景にはやはり、彼のそれ以前からの説教活動とカリスマ的な指導力があったことは認めざるをえない。

教皇とピエールの関係については、つぎの点も留意しておかなければならない。第1節で見たように、教皇の演説には反ユダヤ主義的な要素は見あたらない。また、ピエールについても、たしかに彼は北フランスのユダヤ人に物資供出の強要をしたと推測されるのだが、彼がユダヤ人の生命に危害を加えた形跡は見あたらない。すなわち、本節前半で見たように、民衆十字軍はその出発にあたってユダヤ人に改宗か死かを迫った可能性が高いのだが、このときに攻撃の先頭に立ったのがピエールであったとする直接の証拠はない。これらのことから、H.Liebeschutzはピエールがユダヤ人に対する教皇の寛容政策を尊重していたとみなす。それに対して、ピエールの説教には反ユダヤ主義的な要素があったのであり、それが弾圧の引き金になったというJean Floriの主張がある⁽²⁴⁾。先ほどの論争に関連づけていうと、前者は十字軍起源の教皇一元説と結びつき、後者は教皇と隠修士の二元説と結びつく。意見の対立の焦点はドイツにあるので、第4節でさらに検討を加えることにするが、ピエールがユダヤ人に物資供出を強要したとすれば、その名分を立てなければならなかったはずであり、そ

れは巧まずしてユダヤ人を非難する内容のものとなったのではないかとすれば、ピエールを反ユダヤ主義の範疇から除外することはやはり妥当ではないように思われる。

北フランスには、騎士から民衆にいたるまでの幅広い階層が十字軍の呼びかけに応じる下地があった。すでに、11世紀を通じてスペインのレコンキスタ運動に多くの騎士が参加していた⁽²⁵⁾。また、民衆に対して社会改革を働きかける隠修士の運動も盛んであった。そこに、聖地奪還と神の平和を説く教皇ウルバヌス2世のアピールが届いた。クレルモンの公会議にはこの地域からも多くの聖職者が参加した。教皇と隠修士の運動は敵対的な関係にはなかった。むしろ、Robert d'Arbisselの例に見られるように、教皇はメッセージを広めるために彼らを利用した⁽²⁶⁾。あるいは、隠修士ピエールがすでに独自に十字軍の遠征を説きはじめていた。こうして、民衆十字軍がいち早く進発し、数ヶ月を経て、ノルマンディ公などの大諸侯の十字軍も遠征の途に着いたのだが、このような動きにともなうユダヤ人に対する風当たりが強くなった。

それにしても、ムスリムを敵と定めた十字軍はどうしてキリスト教社会に暮らすユダヤ人にも攻撃の矛先を向けるのか。言いかえると、「遠くのイスラム教徒=近くのユダヤ教徒」という敵対意識の連想はどうしてはたらくのか。次節では、11世紀末の北フランスに見られた反ユダヤ主義的な要素がどこに由来するのかを、11世紀をさかのぼって探ることにする。

第3節 11世紀北フランスのユダヤ人とキリスト教徒

北フランスのユダヤ人の様子をうかがわせる11世紀最初期の史料のひとつに、迫害事件を語ったものがある。作者不詳のあるユダヤ人年代記（いわゆる1007 Anonymous）のなかに、つぎのようにある。

ユダヤ暦4767年 [キリスト教暦1007年]、フランス王ロベール [Robert the Pious] は家臣や貴族たちから、彼らの掟に従わないユダヤの民をあらためさせ、それにしたがわない者は殺してしまうべきだとの進言を受け、

それに応じた。国王はユダヤ人を召集し、民(nation)は一つになるべきであり、ユダヤ人はわれわれの法に帰順すべきであると宣した。しかし、ユダヤ人は神を否定し、トーラーを裏切ることとはできないとの理由で、それを拒絶し、殺戮を甘受した。そのとき、ルーアンのR. Jacob bar. Jequthielが進み出て、ユダヤ人の信仰についての権限は教皇にあるとして、弾圧を批判した。これを聞きつけたリチャード公 [ノルマンディ公リチャード 2 世] はいったんは彼を殺害しようとするが、Jequthielの息子を人質に、彼を教皇のもとへ送ることを認めた。Jequthielはローマに発ち、教皇 [おそらくはベネディクト 8 世] に会見し、ノルマンディで教皇の許可なく迫害が起きている事態を説明し、それを禁止するために使者を派遣するように請うた。教皇は彼を厚遇し、その要請を聞き入れ、使者を遣わした。使者は 4 年の長きにわたって各地をくまなく巡回し、迫害を終わらせた²⁷⁾。

教皇側にはJequthielがローマへ赴いたことを裏づける史料がなく、少なくともこの場面についての1007 Anonymousの信憑性は留保しなければならないが、それに先だって何らかの迫害が北フランスで行われ、それがこうした話に反映されたということは十分に考えられる。このときの迫害がどのような要因にもとづくものなのかを特定することは困難だが、一般にはつぎのような諸要因が介在した。

ユダヤ人はローマ帝国の衰退以来、国王や地方貴族の法的な管轄におかれるようになった。一般に、これら世俗の支配者はユダヤ人を庇護し、彼らに諸特権を与えた。一方、ユダヤ人も国王や貴族を頼り、そのもとでコミュニティを形成した。ユダヤ人の活発な経済活動は領主の生活に欠かせないものとなったし、税源としても彼らはきわめて有用な存在であった⁽²⁸⁾。しかし、支配者間の駆け引きや領内の人心の求心力の確保といった政治的な要因、あるいは支配者の宗教的な純粋性への傾斜や教会からの教唆といった宗教的な要因のために、ときにユダヤ人の立場はきわめて不安定なものになった。たしかに、これらの

うち宗教的な要因には抑制が効くはずであった。それは、ユダヤ人といえども霊的な問題に関しては教会の強い影響下にあるのであり、その教会がユダヤ人に対する寛容を唱えていたからである。しかし、急進的な聖職者がそこから逸脱し、世俗支配者をそそのかすことはめずらしくはなかった。ともかくも、これらの要因がはたらくと、ユダヤ人の立場はしばしばにわかに不安定なものとなった。こうした困難な事態に遭遇したユダヤ人にとって究極的に頼るところは教皇をおいて他にはなかったということを、1007 Anonymousの話は伝えている。

とはいえ、1007年とその後の数年間の事態はユダヤ人にとって最悪の部類に属する局面であったといえることができるであろう。11世紀初めの一連の事件の後、世紀末の十字軍にいたるまで、北フランスのユダヤ人は比較的に平穏な状況にあったのであり、長期的に見ると、彼らと世俗支配者との関係に破綻が生じることはなかった。それはユダヤ人の経済的有用性がいささかも衰えることがなかったからである。たとえば、1066年にノルマンディ公ウィリアムはイングランドの征服に乗り出したのだが、このときをきっかけとして、ユダヤ人は海峡を渡るようになった。それは一方通行の渡航ではなかった。佐藤唯行によると、ユダヤ人が「土着の金融業者・商人階層がきわめて未成熟な当時の英国に渡来し、新たな事業展開をめざすことは彼らにとり、ごく自然な選択であった」⁽²⁹⁾。こうした状況を背景にして、征服王はイングランドの聖職者を前にして、新しい領地においてもユダヤ人が国王の保護下にあり、その許可なくして彼らの管轄を変えることはあり得ないことをあきらかにした⁽³⁰⁾。

ただし、1074年にルーアンの大司教が主宰して開かれた地方公会議では、ユダヤ人に対する古くからある差別規定があらためて確認された。すなわち、このときに公布された14の教会法の1つによって、ユダヤ人はキリスト教徒の使用人をもったり、キリスト教徒の乳母を雇うことはできないとされた⁽³¹⁾。この規定は目新しいものでもなく、ユダヤ人の権利を深刻に侵害するものでもなかった。しかし、教会はときおりこうしたかたちでユダヤ人の差別規定をくり返した。この姿勢の反復そのものが重要なのである。しかも、このときの公会議

にはウィリアム国王が列席していたというから、ユダヤ人の心中は穏やかならぬものがあつたと推測される⁽³²⁾。

11世紀ノルマンディのユダヤ人、世俗支配者、教会の関係からわかることは、世紀の最初期と最末期に迫害事件が勃発したということだけである。これら二つの迫害をつなぐ11世紀の長い期間、不安定な要素もはらんでいたが、おおむねユダヤ人は良好な環境のもとにあった。不十分な史料からは、最初期（1007年の迫害）の要因を特定することはできない。しかし、より根本的な問題は、支配者間の駆け引き、領内の人心の求心力の確保、支配者の宗教的な純粋性への傾斜、教会からの教唆といった先に列挙した政治的宗教的な諸要因が、そもそもなぜユダヤ人への攻撃に向かうのかということである。また、最末期（十字軍にともなう1095年あるいは96年の迫害）についても、反ユダヤ主義の根源的な由来がどこにあるのかは定めがたい。そもそもムスリムを敵と定めたことがなぜキリスト教徒にユダヤ人をも敵として類推させてしまうのか。ノルマンディに関する目下の資料からは、これらの問いに答えることができない。

そこで手がかりをえるために、目をシャンパーニュ地方に転じてみよう。この地方の中心都市トロワはパリをはさんでルーアンのちょうど対極に位置するが、北フランスの民衆十字軍はライン川流域に進路を取ったときに、シャンパーニュの北部を通過している。以下は、Emily Taitzの論述による。

11世紀初めからフランス国王とシャンパーニュ公との間には敵対的な緊張関係が続いていたが、同地方の都市と商業は発展し、ユダヤ人にとって活躍の場が広がった。Joseph Tov Elem(-ca.1040)やSolomon ben Isaac(Rashi:1040-)といった指導者のもとで、トロワをはじめとする各都市のユダヤ人コミュニティは個人ではなくコミュニティが全体として納税する制度を作り上げ、当局の側もユダヤ人の内部の宗教的あるいは行政的な組織にはあまり関与しなかった。

こうした自治のもとで、ユダヤ人は相互に、あるいはキリスト教徒と多様な取引を行った⁽³³⁾。1022年に、あるユダヤ人がブドウ畑と牧草地を含む土地をクリュニーの大修道院長と交換したという記録があり、ユダヤ人の土地の所有と売買が可能であったことをうかがわせる⁽³⁴⁾。しかし、土地が課税対象とされな

かったこと、納税負担を負わなければならない者に対して商業の独占権が認められたことから分かるように、ユダヤ人の主な収入源は土地ではなく、商業であった⁽³⁵⁾。ユダヤ人とキリスト教徒との金融取引も日常的に見られた（このときユダヤ人はかならずしも貸し手となるとはかぎらない）⁽³⁶⁾。さらには、ユダヤ人とキリスト教徒によるパン窯への共同出資、ユダヤ人によるキリスト教徒の労働者の雇用（ワインの樽詰め）の例もあり、両者の経済的な接触は多様に展開された⁽³⁷⁾。

しかし、ユダヤ人とキリスト教徒との相互不信も根が深かった。Rashiはあるユダヤ人からキリスト教徒の食物と自分の食物を同じ窯で一緒に焼いてよいかどうかと訊ねられたときに、それを言下に禁じた⁽³⁸⁾。それに対して、キリスト教徒の側にはいうまでもなく「イエス・キリストを十字架にかけたユダヤ人」というモチーフがあった。前掲小論で論じたように、それは聖パウロ以来の教会における反ユダヤ主義のアルファであり、オメガであった⁽³⁹⁾。このように、両教徒の交流が深まるなかで、ユダヤ教の厳格な戒律の実践はかえって両者の溝をも深めることになりかねなかった。

さらに厄介なことに、ここに異端の問題がからんでくる。世俗当局が公式にキリスト教の異端者を焚殺したのは、1030年のシャンパーニュが最初であった⁽⁴⁰⁾。この頃から、シャンパーニュの世俗支配者も教会も、異端の問題をたんにキリスト教社会内部の問題としてとらえるのではなく、ユダヤ人との接触がキリスト教徒としての信仰に迷いをもたらすのではないかという警戒を抱きはじめるようになった。これもまた、両教徒の交流の深まりが両者の間に緊張感をもたらす結果を招いたものと理解しうる。

ところで、11世紀初頭にはシャンパーニュを取りまく諸地域で、いくつかのユダヤ人迫害事件が起きている。1007年のノルマンディの事件については、すでに述べた。さらに、Raoul Glaberの年代記によると、1010年頃にシャンパーニュの西に位置するオルレアンで、エルサレムの聖墳墓教会がムスリムによって破壊されたのはユダヤ人のせいだとする理由のもとにユダヤ人への迫害が起きた⁽⁴¹⁾。また、1012年にはラインラントのマインツで、皇帝ハインリッヒ 2 世

の命令にもとづいてユダヤ人が追放された⁽⁴²⁾。これらの諸事件が連動していたとする指摘もあるが、他方で、オルレアンやマインツの事件の史料記事の信憑性を疑ったり、事件は小規模であったとする指摘もある⁽⁴³⁾。いずれにしろ、当時、ユダヤ人が何らかの危険な状況にあったということが推測される。こうした状況のなかでシャンパーニュのユダヤ人が攻撃を免れたのは、この地域で彼らが周辺諸地域よりも特別に寛容に取り扱われていたからではなく、この地域のユダヤ人が周辺諸地域よりもなお数が少なかったからにすぎないと、Taitzは指摘する⁽⁴⁴⁾。

世紀末の北フランスにおけるユダヤ人に対する攻撃は、その反ユダヤ主義的な性格をどこから導き出してきたのか。もとより不十分な論証であるが、つぎのように概括することができるであろう。シャンパーニュの状況を敷衍することができる」とすると、遅くとも11世紀の終わりまでには、北フランスのユダヤ人はキリスト教徒との経済的な取引を日常的に営むようになった。ユダヤ人は世俗支配者、教会、民衆というキリスト教社会のあらゆる階層と交流を深化させた。しかし、それは宗教的にはたがいに隔絶しているという意識、もっとも悪い場合には宗教的な相互不信感を増幅するという逆説的な作用をとともうものでもあった。そのために、多数者であり権力を持っているキリスト教徒の側にはおのずと、何かのきっかけがあればユダヤ人の弾圧に向かいかねない潜在的に攻撃的な志向が培われていった。早くも11世紀初頭にそれが顕在化したと理解することもできる。そして、その後ながらく日常的な相互交流の局面が続いたのちに、その間にさらに深く潜在化されていった反ユダヤ主義的な志向が、十字軍の結成をきっかけとして、ふたたびユダヤ人に対する攻撃的な態度となって表出されたのである。

十字軍という教会が先頭に立つキリスト教社会の純化の膨張的な運動は、必然的にキリスト教社会の内部的な純化という動きをとともう。ユダヤ人はそれになやすく巻きこまれてしまったのであった。

第4節 ドイツ・ライン川流域のユダヤ人迫害事件

場面は北フランスからドイツ・ライン川流域におけるユダヤ人の迫害に移る。1096年の苛烈な迫害事件はどのようにして起きたのか。まずはじめに、簡単に経過をたどってみよう。

正確な日付はわからないが、隠修士ピエールはおそらく2月か3月頃に北フランスを発った。ピエールは大勢の一般民衆を率いたが、経験を積んだ騎士も彼に直接に付き従って出発したか、あるいは彼と相前後して出発している。たとえば、Guatier sans Avoirという貴族は、ピエールの説教を聞き、それに心酔し、3月初めに歩兵の大集団と8人の騎士の手勢を引き連れて出発した⁽⁴⁶⁾。ピエールの一団は1096年4月初めにはトリール(Trier)に到着した。彼は前述のごとく、フランスのユダヤ人から手に入れた手紙をこの都市のユダヤ人にかざし、進軍に必要な物資の供出を強要した。その後、ピエールはケルン(Cologne)へと向かい、おそらくケルンその他の都市でもキリスト教徒に説教をし、ユダヤ人からは物資を徴発したと思われる。このようにしてドイツを通過するうちに、もとのフランス人だけでなく、各地の一般民衆のほかにも、シュバーベン、バヴァリア、ロレーヌなどの騎士も加わり、一団は大きく膨れ上がっていった⁽⁴⁶⁾。4月中旬にケルンに到着したときには、すでに彼にしたがう者は総勢で1万5千人ほどもいたといわれる⁽⁴⁷⁾。ケルンにしばらく滞在した後、ピエールはドナウ川をめざして南下した。

ピエールの軍隊がドイツにさしかかった頃、ピエールの説教を直接に聞いたかあるいはその声望を耳にしてのことか、レーニンゲン伯エミコ(Emico)のもとにシュバーベンとラインラントの騎士たちが集まり、ピエールとは別の一団が形成された。1096年5月初めにシュパイエル(Speyer)でユダヤ人迫害の口火を切ったのはこの軍団であった。エミコ軍はシュパイエルに続いて、ウォルムス(Worms)、5月下旬にはマインツ(Mainz)で、さらに激しい攻撃をくり返した。シュパイエルでは11人が殺害され、ウォルムスでは犠牲者は2日間で800人に及び、マインツではエミコ軍が襲撃した最初の日だけで、1100人が死に追

いやられた⁽⁴⁸⁾。フランス、イギリス、フランドル、ロレーヌ、シュバーベンの勢力がエミコ軍に合流したのはこのときであり、その少なくとも一部はマインツでのユダヤ人襲撃に加担したと思われる⁽⁴⁹⁾。いくつかのユダヤ人年代記がもっとも多く紙数を費やしているのが、このマインツでの大虐殺である。5月末、エミコ軍はケルンに北上し、ここでもユダヤ人を攻撃した。

ケルンからエミコ軍の本隊はドナウ川へと進路を変えたが、離脱した一部の集団は南東に足を延ばし、6月初めにトリール、メッス(Mets)などのモーゼル川峡谷のユダヤ人を攻撃した。トリールに隠修士ピエールが現れ、ユダヤ人に物資を提供させたのは、ほんの2ヶ月ほど前のことであった。さらに、これらの残党は6月末にケルンに戻り、それから7月にかけてケルン周辺の町々でユダヤ人の迫害をくまなく繰り返した。その一つEllerの町では300人が集団自決を遂げた⁽⁵⁰⁾。彼らはユダヤ人の攻撃が済むと、その多くが故地に帰るか、後続のGodefroy of Buillonの十字軍などに合流した。

以上が簡単な経過である⁽⁵¹⁾。ラインラントではユダヤ人は異なる種類の迫害を受けた。まず、隠修士ピエールである。彼は4月の間、各地を巡歴し、説教をし、ユダヤ人から物資を徴発した。しかし、彼がドイツでユダヤ人の生命に直接的に危害を及ぼしたり、強制改宗を試みたとする史料はない。それに対して、エミコ軍とそこから離脱した集団は5月から7月にかけて、ラインラント一帯でユダヤ人の家屋の破壊、金品の略奪、トーラーの破却、改宗の強要、殺戮を繰り返した。ユダヤ人のなかにはこれらの攻撃を受けて、果敢に抵抗し、ときには十字軍の兵士を打ち取ったりする者もいたが、多勢に無勢という圧倒的に不利な状況のなかで、多くは改宗を拒んで殺されるか、敢然と集団自決をとげた。もちろん、圧力に屈して洗礼を受ける者も少なくなかった。反対に、強制的に洗礼され、途方に暮れる者もいた。

しかし、ピエールの言動とエミコ軍の激しい迫害との間につながりがあったということも十分に考えられる。第一に、エミコはあきらかにピエールのドイツへの到来に刺激を受けて十字軍を起こし、すぐさまユダヤ人を攻撃する挙に出た。ピエールに多大な影響を受けたと思われるドイツ人説教師Gottschalkも

後にレーゲンスブルクなどで、多くのユダヤ人を強制的に洗礼する暴挙に出た⁽⁵²⁾。彼らをこうした行動に駆り立てる要素がピエールになかったとは言いきれない。第二に、タイミングの問題であるが、ピエールのトリール到着が4月初め、エミコ軍から離脱した集団によるトリールでの迫害が6月初め、ピエールのケルン到着が4月中旬、エミコ軍とその離脱集団によるケルンとその周辺での迫害が5月末以降のことである。これらの都市では、ピエールの到着が反ユダヤ主義的な下地を作り上げていたのかもしれない。というのは、年代記によると、それまでユダヤ人に敵対的ではなかったトリールの市民が、ピエールの登場でその態度を急に硬化させるようになったからである⁽⁵³⁾。

第三に、低地ロレーヌの大領主Godefroy of Buillonの言動からの類推である。8月に出立したGodefroyは民衆十字軍の範疇に属する者ではない⁽⁵⁴⁾。彼はBuillonの城を担保にリエージュの司教から資金を得て、軍資を捻出した（大領主でも流動性資金にはかくも苦労した）⁽⁵⁵⁾。さて、Solomon bar Simsonの年代記によると、彼は出発の準備中に、ユダヤ人を流血の目に遭わせ、ユダヤと名の付く者を完全に根絶やしにすることによってキリストの血をあがなうまでは、一步も先へは進まないと広言し、ユダヤ人に恫喝をかけた⁽⁵⁶⁾。これがいつのことか明確には定めがたいが、年代記には、マインツのラビ Kalonymosがユダヤ人の諸コミュニティを代表してGodfreyの圧力を回避するために奔走したとされており、彼が5月下旬に起きたエミコ軍によるマインツ襲撃のときに奮闘の末に命を落としたことからすると、恫喝は少なくともそれ以前のこととなる。結局、Godefroyはマインツとケルンのユダヤ人からそれぞれ500枚の銀貨を献上させた。それが遠征の準備中ではなく、公が実際に当地に立ち寄ったときのことであるとすれば、大迫害後の混乱のさなかの出来事となる。いずれにしろ、Godefroyはかなり過激にユダヤ人を弾圧する発言をし、十字軍の立場からそれが正当なものであることを主張している。ピエールもユダヤ人に直接の危害は加えなかったにせよ、同じような趣旨の説教を行ったかもしれない。

ここで、ユダヤ人の三つの年代記から、十字軍がユダヤ人を迫害する動機を直接述べたところをいくつか拾い出してみよう。次節では、それらを日常性と

事件性との連関という視点から分析する。なお、当然予想されるとおり、糧秣の確保や金品の略奪という動機も年代記の随所にうかがえるのだが、ここでは取りあげない。もっぱらユダヤ人の資産を兵站としたり、たんなる欲得から略奪をはたらいたりすることは、つぎのような宗教的な動機で迫害が生じなければ起こり得なかったという点において、あくまで付随的な動機であると理解すべきであろう。

「見よ、いまわれわれは聖墳墓を探し求め、ムスリムに復讐をするための長旅についている。しかるに、いまここにユダヤ人がいる。彼らの先祖はわけもわからずにイエスを殺し、十字架にかけた。まず彼らに復讐し、イスラエルの名が後世に残らぬよう根絶やしにするか、われらの信仰を受け入れさせ、自らの非を認めさせるかしようではないか」⁽⁵⁷⁾。

「お前たちはわれわれが崇拝しているお方(our object of veneration)を殺し、木に吊した者たちの子だ。イエスはいわれた『その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい』(マタイ福音書27.25)。われわれがその子孫であり、復讐するのはわれわれの義務なのだ」⁽⁵⁸⁾。

「なぜわれわれは、彼らを生かし、彼らがわれわれに交じって住むのをおめおめと許しておこうか。奴らに剣を突きつけることから始めよう、それから遠征の旅に取りかかろう」⁽⁵⁹⁾。

あらゆる地方から貴族も民衆もラインラントの十字軍に雲霞のように集い、声高に叫んだ。「ユダヤ人を殺す者はそのすべての罪を許されるであろう」。そのなかには、ユダヤ人を一人虐殺するまではこの国を発ちはしないと主張するDithmar公（身許不明。一説にはドイツ人の司祭Volkmar（註52）参照）がいた⁽⁶⁰⁾。

マインツの市民がエミコ軍のために門を開けたときの兵士の叫び。「見よ、門がひとりでに開いたぞ。これは、イエスがその血の償いをできるようにとわれわれのためにしてくれたことだ」⁽⁶¹⁾。

これらに、すでに紹介したMainz Anonymousの冒頭部分における北フランスの十字軍の主張、Guibert de Nogentの自伝に出てきたルーアンの十字軍の主張、先に取り上げたGodefroy of Buillonの反ユダヤ主義的な主張をくわえてもよい。これらにみなぎっているのは、「ムスリムを倒すなら、まず身近にいるユダヤ人も根絶やしにするか、キリスト教に改宗させよ」という主張である。これらのモチーフや文言は似通っており、それはテキスト自体の類縁性や系譜を分析することが必要なほどである。実際にそうした考証もあるのだが、ここで取りあげる余裕はない⁽⁶²⁾。

とりあえずJonathan Riley-Smithにならって、これを、キリスト殺し(crucifixion)を犯したユダヤ人に対する復讐の欲求と呼ぶことにしよう⁽⁶³⁾。ムスリムに対して立ち上がった十字軍兵士たちの多くがもともとムスリムとユダヤ人の区別を付けることができなかったというところに問題がある。彼らはユダヤ人を迫害してもいいと思いこんでしまったのである。聖地を奪い、東方キリスト教徒を侮辱したとされるムスリムとイエスを十字架にかけたユダヤ人との混同が、十字軍を構成した騎士の間で実際に広くなされていたということは、大いにあり得ることである⁽⁶⁴⁾。ウルバヌス2世のアピールは間違っただけで受け止められた。隠修士ピエールや説教師Gottschalkのような下級聖職者にもそうした傾向があったかもしれない。あるいは、彼らの説教には聴衆にこのような誤解をもたらす含みがあったかもしれない。

さらに、ここで注目すべきは十字軍のなかに見られる終末論的な要素である。Upper Lorraineの小土地保有者であったエミコは、十字軍を率いる以前から粗暴な人物であつたらしい⁽⁶⁵⁾。Solomon bar Simsonの年代記によると、エミコにまつわるつぎのような話があったという。イエスの使徒の一人がエミコのところにやってきて、彼の体に一つの徴を付けた。その徴とは、エミコがMagna Gracia [古代ギリシャが南イタリアに所有した海港植民地とされる] に着いたら、イエスが姿を現し、彼に王冠を授けるということ、そしてそれによってエミコが敵をうち負かすということを予告した聖痕であつた⁽⁶⁶⁾。この話がエミコを黙示録文学のいう「最後の皇帝」に仕立て上げようとしたものであることは、

あきらかだといってよい。Ekkehard of Auraの年代記によると、エミコはサウルのように黙示(divine revelation)に動かされたと触れ回った。彼が1万2千人もの十字軍を集めることができたのは、そのおかげであった⁽⁶⁷⁾。

たしかに、第一回十字軍と終末論との結びつきは直接的な例証に乏しく、誇張することはできない⁽⁶⁸⁾。しかし、第1節で見たように、Guibert de Nogentは十字軍の終末論的なモチーフを教皇の口を借りて語っている。また、つぎのような話もある。1086年、南イタリアの司教Benzo d'Albeが皇帝ハインリッヒ4世を称え、中世初期から伝わる代表的な黙示録の一つである*Tiburtine Sibyl*を引き合いに出し、彼に最後の皇帝の称号を捧げようとした。皇帝にはまだ、ギリシャの巫女(Sibyl)の預言した長い道が残されている。アプリアとカラブリア[南イタリア]を治めたのだから、いずれ皇帝はビザンツの皇帝ともなり、エルサレムに遠征し、聖墳墓その他の主の聖地を救い出し、王冠を受けることになるであろうと皇帝を持ち上げるBenzoの語りには、エミコが身に飾ろうとした終末論的な聖性に相通ずるものがないであろうか⁽⁶⁹⁾。もし十字軍にこのような終末論的・黙示録的な雰囲気が幾分なりとも備わっていたとしたら、終末が近づこうとしているのだからユダヤ人は改宗に応じるはずである、それを拒む者は永劫の地獄に堕ちるべきであると主張され、それが行動に移されたとしても不思議ではない⁽⁷⁰⁾。

第5節 11世紀ドイツ・ライン川流域のユダヤ人とキリスト教徒

ムスリムと戦うべき十字軍がユダヤ人に攻撃の矛先をまず向けたのは、それがムスリムとユダヤ人の区別を付けていなかったからであると、先に述べた。これはRiley-Smithの説であり、さらに検討に値する⁽⁷¹⁾。しかし、この研究ノートで論じたいのは、日常的なキリスト教徒とユダヤ人との交わりから十字軍におけるユダヤ人の迫害へという局面の転換がなぜ生じたのかという特定のな問題である。したがって、第3節で北フランスにおけるキリスト教徒とユダヤ人との日常的な交流を検討したように、ライン川流域における両者の日常的な交流を視野に入れなければならない。キリスト教徒は日頃ユダヤ人とどのように

接触していたのか、それが十字軍の到来によってどのように変化したのか。

まず、市民、市の有力者、聖職者がどのように十字軍に対応したのかを、3つのユダヤ人年代記に探ってみよう。

シュパイエルに十字軍が来たとき、それに呼応してユダヤ人の攻撃に加担する市民も現れたが、司教はユダヤ人を保護する立場に立ち、加害者を捕らえ、その手首を切断するという懲罰を行った⁽⁷²⁾。

ウォルムスでは、ユダヤ人は司教のもとに避難する者と、彼らを守ってくれるという隣人の約束を信じて、家に残る者とに分かれた。結局、二つともに十字軍、市民、近隣の村民たちの手によって迫害を受けた。ためらいなく殺害される者もいたが、キリスト教徒と親しくしていたユダヤ人のなかには執拗に洗礼を促される者もいた⁽⁷³⁾。

マインツでは、危険が近づくと、大司教、都市貴族(count)、彼らの部下、市の有力者たちはユダヤ人を何としてでもかくまうことを約束した。実際に彼らは、十字軍が現れ、市民や農民が彼らに呼応しようとしたときに、それをくい止めようとした。こうして、十字軍と市民の間に諍いが起き、十字軍兵士がひとり殺された。結局、市民はエミコ軍に門を開け、ともに大司教と都市貴族の館に殺到し、殺戮を繰り返した。大司教は自分も殺されると思い、逃亡したが、のちにラビのKalonymousを市から救出することを試みてもいる。十字軍と市民は今度は連れだって市街に繰り出し、ユダヤ人を見つけしだい、改宗を勧め、拒否する者を強制洗礼するか、殺害した。近くの村落に逃げた者も村民に囲まれ、同じ運命にあった⁽⁷⁴⁾。

ケルンでは、知人のキリスト教徒のもとにかくまわれたユダヤ人は難を逃れた。大司教がさらに彼らを管轄の周囲の7つの村に分散させ、避難させた⁽⁷⁵⁾。

エミコ軍の残党によるケルン周辺の攻撃には、「十字軍の印を付けた者もそうでない者も」加わった。NeussやEllerでは、改宗を受け入れない者が拷問されることもあった。Xantenでは、あるユダヤ人が知りあいの司

祭たちから洗礼を受けるように説得されたが、失敗に終わった。Mehrでは、市長が十字軍を市外に押しとどめたうえで、ユダヤ人を集め、改宗を説得した。市長は彼らを脅えさせようとして十字軍の大群を見せたが、それも効果がなく、集団自決を防ぐために一晩別々に隔離し、翌日十字軍に引き渡した。このままでは町が破壊されるという苦渋の決断であった⁷⁶⁾。

すでに述べたが、隠修士ピエールがトリールに姿を現すと、市民は急にユダヤ人に敵対的になった。ピエールが去ると（4月）、ラインラントで起きた事件（5月）を知った市民たちが不穏な動きを見せたので、ユダヤ人は司教のもとに逃げ込み、被害はトラーの侮辱にとどまった。しかし、今度は十字軍が到来し（6月）、自らも攻撃を受けそうになった司教は狼狽し、教会の一室にしばらく隠れた後、ユダヤ人に退去か改宗かを迫った。結局、ユダヤ人を待ち受けていたのは激しい迫害であった⁷⁷⁾。

キリスト教徒の態度の分布はある程度はっきりしている。まず、司教や大司教などの高位聖職者と市の有力者（司教都市であるならば、高位聖職者と市の支配者とは重なる）は十字軍の到来に際して、ユダヤ人を保護しようとそれなりに力を尽くすのだが、十字軍側の勢力に抗しきれず、結局はユダヤ人を守り通すことができなかった。たしかに、これらの指導的立場にある人たちは、シュパイエル⁷⁸⁾の司教Johnをのぞいて、ほとんどがユダヤ人から金品を受け取り、保護を約束したと推測される。言いかえると、金銭を見返りとするというユダヤ人の常套のやり方を知っており、保護の約束が自らの利益になることを知っていたのであるから、保護の約束が金銭欲に駆られた虚偽の姿勢であったという一面も否定できない。

それに対して、司祭のような下級聖職者と一般の市民は十字軍によるユダヤ人の攻撃に積極的に加担する者とユダヤ人を攻撃から守ろうとしたり、その命だけは救おうと努める者とに分かれた。

どうしてこうした分布が現れたのか。高位聖職者と市の有力者の態度を大き

く規定していたのは、皇帝と教皇の対ユダヤ人政策である。それをまず確認しておこう。

Solomon bar Simsonの年代記によると、Godefroy of Buillonが十字軍に出発する前にユダヤ人に強い脅しをかけてきたとき、各地のユダヤ人コミュニティは動揺し、諸コミュニティを代表してマインツのラビKalonymosが当時イタリアに滞在中の皇帝ハインリッヒ 4 世に使者を派遣した。事態を知った皇帝はユダヤ人に危害を加えるのではなく、彼らを庇護することを帝国の聖俗の支配者たちに命じた⁽⁷⁸⁾。皇帝の素早い反応を見て、ユダヤ人は大きな安心を得たであろう。それに先だっては、1084年にシュパイエル司教Rudigerが同市のユダヤ人に特権を付与した。ユダヤ人の年代記には彼は「父のように」ユダヤ人の保護に熱心であったと記されている⁽⁷⁹⁾。また、1090年には皇帝がマインツのユダヤ人に特権を与えている。それについて、K.R.Stowはつぎのように解説している。カロリング帝国のルイ敬虔王のときと同様に、こうした幅広い特権の付与はユダヤ人の地域経済への参加をテコ入れするものであったが、さらに従来にはない規定も盛り込まれた。たとえば、キリスト教徒に不利な証言をユダヤ人が法廷で行うことを認めたこと、archisynagogusという役職を設け、それに一定の限界を付しながらもユダヤ人内部の司法権を委ねたことなどは、まさに画期的な措置であった⁽⁸⁰⁾。

教皇の政策として特筆すべきは、1063年に教皇アレクサンドリウス2世がレコンキスタの緊張が高まるなかで、敵対するムスリムとキリスト教徒に反旗を翻しているわけでもないユダヤ人とを峻別し、後者を攻撃しないようにとの指示を出したことである⁽⁸¹⁾。それは従来からのユダヤ人寛容策の延長上に位置づけられる指示であった。エルサレムをめざした十字軍に関していうと、たしかに、叙任権闘争のさなかで皇帝と教皇が反目するという状況のもとで、全体的に皇帝の勢力が強かったドイツからは司教はほとんどクレルモン公会議に招かれなかった⁽⁸²⁾。したがって、彼らがウルバヌス 2 世のアピールをどの程度理解していたのかは、おぼつかないところがある。しかし、ドイツの高位聖職者の多くがこのように教皇と距離を置いていたとしても、皇帝の息のかかった者の

念頭にあったのはこんどは皇帝の方針だった。要するに、教皇陣営も皇帝陣営も、教会上層部の基調はユダヤ人の保護という点で合致していた。

しかし、ユダヤ人に対する市民の態度はもっと複雑にならざるを得なかった。シュパイエルの場合が参考になるであろう。

1084年にシュパイエルのユダヤ人に特権が与えられたことには、つぎのようないきさつがあった。ある日、マインツでユダヤ人の居住区とキリスト教徒の一街区が火事に見舞われた。そのとき、火災の責任を問われるのではないかと恐れたユダヤ人の一部がシュパイエルに新しい定住地を求めた。司教はこれを歓迎し、居住区を整備し、何かと面倒を見た⁽⁸³⁾。これについて、R.Chazanはつぎのように解説している。司教には彼らの定住がシュパイエルの経済的な発展に貢献するだろうという思惑があったことは間違いない。地中海からフランスを北上し、ライン川流域へと到達した（あるいはイタリアから直接にこの地域へとやってきた）ユダヤ人は早くから都市化された存在であり、とりわけ彼らの商業活動は遠隔地貿易から近隣の小規模取引にいたるまで大きな魅力であった。第3節では、シャンパーニュ地方のユダヤ人の経済的な発展を見た。シャンパーニュとラインラントのユダヤ人は往来も頻繁で、おそらくラインラントでもユダヤ人はキリスト教徒と多様な経済的取引を行ったと思われる。

こうして、ユダヤ人への期待を膨らませた司教はユダヤ人に自治的な特権を与えたのであるが、これはそれまで市行政にたずさわっていた者たちの権限を侵害するものにほかならず、彼らにとってはかならずしも望ましいことではなかった。ユダヤ人との交流で経済的な恩恵を受けることもなく、むしろユダヤ人と競合するような立場にあった者であれば、ユダヤ人への敵意はおそらく高まっていっただろう⁽⁸⁴⁾。そもそも火災という不慮の出来事で市民の態度が変化することをマインツのユダヤ人が恐れたといういきさつがある。Rudigerはユダヤ人の居住区の入り口に錠を付けることを認めた。おそらくそれはユダヤ人が望んだことであろう。

マインツからシュパイエルへの移住は、日常のキリスト教徒とユダヤ人との社会的経済的交流が進展する一方で、けっして両者の緊張の糸がほどけること

がなかったことを物語っていて、興味深い。11世紀末のラインラント流域では、他の都市でも同じような状況にあったと考えてもいいだろう。ユダヤ人をかばった者と十字軍の攻撃に加担した者との市民が分かれた理由はここにある。

Mainz Anonymousの年代記によると、北フランスの同胞が十字軍にともなう危険性の増大を警告してきたとき、マインツのユダヤ人はつぎのように返答している。「われわれには心配すべき理由はない。そうしたこと [改宗の強要] については一言も聞き及んでいないし、われわれの生命が剣によって脅かされるなどとは思ひも寄らないことである」⁹⁹。自分たちの安全に対する自信のほどをうかがわせる筆致である。おそらくユダヤ人にしてみれば、十字軍という新奇の現象が自分たちを危地に追いやるなどということは思ひも寄らぬことだった。彼らは皇帝や教皇の寛容政策という大きな枠のなかで、市民のなかの敵対的な感情への警戒よりもその友好的な態度への信頼をより強く抱いていたのである。しかし、「ムスリムが敵なら、ユダヤ人も敵である」、さらには「世界の終わりにはユダヤ人を洗礼すべし、さもなければ殺すべし」と声高に主張する十字軍が非日常的な状況を作りだすと、それに一部の市民が呼応した。キリスト教徒とユダヤ人との日常の友好的な関係もその勢いに押され、断ち切られてしまった。それに、残念ながら、身命を賭してでも迫害を阻止しようとしたキリスト教徒の市民がいたとはユダヤ人の年代記には記されていない。このとき、ユダヤ人の運命はまさに暗転したのであった。

ユダヤ人にとって不運なことに、皇帝の勢威も実は万全ではなかった。エミコ軍と在地の市民や村民による大迫害は、皇帝によるユダヤ人庇護の指令が出された後に起きた。皇帝がイタリアではなくドイツにいたら事件は起きなかったかもしれないが、とにかく事実として、エミコは皇帝の政策を顧みなかった。たしかに、ユダヤ人はきわめて有利な諸特権を与えられるにいたった。しかし、裏返していうと、このことはローマ法におけるユダヤ人の市民権の普遍的な保証が完全に後退し、彼らの立場が支配者の個人的な恣意に委ねられるようになったことを意味する。Stowはこれを、中世ユダヤ人の法的地位の分水嶺であると言いつけている。10世紀から見られ始めたこうしたユダヤ人の法的地位の変

化は、今やはっきりしたものとなった⁽⁸⁸⁾。それでも、個人的な恣意といっても、皇帝や国王がユダヤ人を庇護する方針を盤石にしておけば問題はなかったはずである。しかし、たとえばフランスでは、12世紀末のフィリップ尊厳王の頃から、反対に国王はユダヤ人を非難し、抑圧する方針をしだいに固めていくことになる⁽⁸⁷⁾。対照的にドイツでは、皇帝がユダヤ人を庇護する方針を継続しながらも、その権力基盤の不安定性からそれをかならずしも貫くことができなかったのである。

教皇についても然りである。その勢威が絶対的なものではなかったことを明瞭に示しているのは、いうまでもなく隠修士ピエールや説教師Gottschalkのような下級聖職者の存在である。十字軍の起源が完全に教皇にあったのか、それともピエールが独自に十字軍を興したのかという議論はここでも脇に置くとしても、これまで何度か論じたように、ピエールが教皇のアピールの埒外で反ユダヤ主義的な言動を取ったということは大いにあり得ることである。もしそうだとしたら、教皇のユダヤ人に対する寛容政策はキリスト教社会の末端ではかならずしも効力を発揮しなかったということになる。ピエールが率いた民衆十字軍は教会上層部の方針を北フランスとドイツ・ライン川流域であっさりと覆したのである。

もう一つ、留意すべき点がある。大迫害の翌1097年、イタリアから帰還した皇帝は強制改宗された者がユダヤ教に復帰することを認めた⁽⁸⁹⁾。皇帝の方針はこのように一貫しており、迫害後に事態は急速に収束に向かった。しかし、ラインラントの迫害の報に接して、教皇庁が機敏に善処した様子はなかった。皇帝ハインリッヒ4世が擁立した対立教皇クレメンティウス3世は、いったん改宗された者の取り消しは認められないことにこだわった。この足並みの乱れは皇帝にとって大きな失点であり、彼は対立教皇のこうした態度を否定して、ユダヤ人のユダヤ教への復帰を認めたのであった⁽⁸⁹⁾。一方、教皇ウルバヌス2世はどのような策をも講じていない⁽⁹⁰⁾。このことはウルバヌス2世がこの問題ではクレメンティウス3世と同じ見解をもっていたことを示唆してはいないだろうか。ユダヤ人の強制改宗を認めないということといったん改宗した者の棄教

(旧教への復帰)を認めないということは矛盾しない。いかなる場合であろうとも、洗礼の秘蹟は取り消しの効かないことであるという考えがそこにあるようにも思われる。もしそうであるとしたら、教皇の消極的な態度は、そのユダヤ人保護政策がカトリックの教義に照らして限界を抱えていたことを示すものとなる。

おわりに

北フランスとドイツ・ラインラントでは、ユダヤ人とキリスト教徒は日常的に交流しながらも、それが相互の隔たりをももたらすという関係にあった。第一回十字軍では、金貸しとしてのユダヤ人はまだこの関係において重要なポイントとなっていない。12世紀の中頃から、この職業が両者の交流と疎隔の関係をさらに強めることになる。また、日常から事件へという転換のきっかけとなるものも十字軍の遠征にとどまらなくなり、とりわけ儀式殺人や聖体侮辱などのモチーフがたびたび現れるようになる。第一回十字軍のときに起きた北フランスとドイツ・ラインラントにおける迫害は、広域的かつ大規模な迫害としては西欧ユダヤ人の歴史上初めてのことであった。そして、それはその後くり返し勃発する迫害のパターンの原型でもあったといえることができる。

第1回十字軍とユダヤ人迫害 註

- (1) Rheimsの修道士Robertは1107年頃に演説を記録した。Robert of Rheims, *The Historia Hierosolymitana*, in : Peters, E., ed., *The First Crusade: The Chronicle of Fulcher of Chartres and Other Source Materials*, 2nd edition, University of Pennsylvania Press, 1998, pp.26-29.
- (2) Dolの大司教Baldricの版は1108年頃に書かれた。その演説内容は Peters, E., ed., *ibid.*, pp.29-33に所収。
- (3) Robert of Rheims, *ibid.*, p.28.
- (4) Chartersの聖職者Fulcherはクレルモン公会議に参列し、その後北フランスの諸侯による十字軍に参加し、エルサレム王国でこの年代記を1120年代末に完成させた。勅令の内容はFulcher of Chartres, *A History of the Expedition to Jerusalem*, in : Peters, E., ed., *ibid.*, pp.50-52.
- (5) France, J., "Patronage and the Appeal of the First Crusade", in : Phillips, J., ed., *The First Crusade: Origins and Impact*, Manchester University Press,

1997, p.5 et sec.

- (6) Liebeschütz, H., "The Crusading Movement in Its Bearing on the Christian Attitude towards Jewry", rpt. in : Cohen, J., ed., *Essential Papers on Judaism and Christianity in Conflict from Late Antiquity to the Reformation*, New York University Press, 1991, p.262.
- (7) 手紙は1096年10月7日に出された。その内容はPeters, E., ed., op.cit., pp.44-45に所収。
- (8) Robert of Rheims, *ibid.*, p.29.
- (9) Nogentの大修道院長Guibertは1111年頃に第一回十字軍の歴史を完成させた(Peters, E., ed, *ibid.*, p.33)。ウルバヌス 2 世の演説の終末論に関する箇所は Guibert de Nogent, *Geste de Dieu par les Francs : Histoire de la première croisade* (Introduction, traduction e notes par Monique-Cecile Garand), Brepols, 1998, pp.80-81.
- (10) Flori, J., "Une ou plusieurs <première croisade> ? : Le message d' Urban II et les plus anciens pogroms d'Occident", *Revue Historique*, Vol.285, No.1, 1991, p.22.
- (11) 終末論と反ユダヤ主義との結びつきについては、拙稿「中世カトリック教会の反ユダヤ主義的モチーフに関する一考察：高利禁止法との関わり」『金沢大学経済論集』第35号、48-49ページ。
- (12) 以下、この研究ノートにおける引用は、史料にしたがいながらも、その内容を適宜要約するかたちをとることとする。

第一回十字軍にともなうライン川流域のユダヤ人迫害を記述したユダヤ人の年代記は 3 つある。Solomon bar Simsonの年代記、Rabbi Eliezer bar Nathanの年代記、それに、おそらくマインツのユダヤ人が書いたと思われるが、作者不詳のいわゆるMainz Anonymousである。いずれも Eidelberg, S., translated and edited, *The Jews and the Crusaders*, The University of Wisconsin Press, 1977 に英訳全文があり、以下それにしたがう。なお、これら年代記の成立時期や相互の関係については諸説があるが、ここでは省略する。そのサーベイとしては、Abulafia, A.S., "Interrelationship between the Hebrew Chronicles on the First Crusade", *Journal of Semitic Studies*, Vol.27, No.2, pp.221-239, 1982, rep: in Abulafia, A.S., *Christians and Jews in Dispute*, Ashgate, 1988, XVIIがある。

- (13) Mainz Anonymous, *ibid.*, pp.99-100.
- (14) Eidelberg, S., op.cit., p.2.
- (15) Guibert de Nogent, *Autobiographie* (Introduction, édition et traduction par Edmond-René Labande), Les Belles Lettres, 1981, pp.247-249.
- (16) Guibert de Nogent, *ibid.*, pp.249-253.
- (17) ノルマンディ公は、同じく征服王の息子でイングランドを継承した William Rufusから、ノルマンディの領地を担保に 1 万マルクの金を借り、軍資金を調達した。Norman Golbはノルマンディ公の出発にあたってルー

- アンでユダヤ人迫害が起きたと推測する。Golb, N., *The Jews in Medieval Normandy: A Social and Intellectual History*, Cambridge University Press, 1998, pp.116-118.
- (18) Solomon bar Simson, *op.cit.*, p.62.
- (19) Richard, J., *Histoire des croisades*, Fayard, 1996, pp.40-41.
- (20) 隠修士についてはMorris, C., *The Papal Monarchy: The Western Church from 1050 to 1250*, Clarendon, 1991, pp.68-74.
- (21) Guibert de Nogent, *Geste de Dieu par les Francs*, *op.cit.*, pp.86-87.
- (22) Guillaume de Tyre が語るPeter the Hermitについての逸話は Peters, E., ed., *op.cit.*, pp.108-109に所収。Guillaume de Tyreは1130年にエルサレムで生まれ、フランスとイタリアで教育を受けた。彼はまた、教皇ウルバヌス2世の演説のなかに、隠修士ピエールがエルサレムからの手紙を教皇に差し出した話を取り入れた唯一の歴史家である。Kedar, B.Z., “L'appel de Clermont vu de Jérusalem”, in : *Le concile de Clermont de 1095 et l'appel à la croisade: Actes du Colloque Universitaire International de Clermont-Ferrand(23-25 juin 1995)*, École Française de Rome, 1997, pp.287-294.
- (23) フランス系の年代記をもとにしてウルバヌス 2 世の主導性を論じる従来の定説に対して、ドイツ系の年代記を再評価し、隠修士ピエールによる十字軍の提唱と行軍におけるその活躍をクローズアップさせるのは、Blake, E.O., C.Morris, “A Hermit Goes to War : Peter and the Origins of the First Crusade”, in : Sheils, W.J., ed., *Monks, Hermits and the Ascetic Tradition*, Basil Blackwell, 1985, p.79-107, Morris, C., “The Aims and Spirituality of the First Crusade as seen through the Eyes of Albert of Aachen”, *Reading Medieval Studies*, Vol.16, 1990, pp.99-117, Morris, C., “Peter the Hermit and the Chroniclers”, in : Phillips, J., ed., *The First Crusade*, *op.cit.*, pp.21-34である。それに対して、十字軍の起源におけるピエールの完全な独自性には留保を付けるが、十字軍の運動には教皇の流れを汲むものと民衆運動的な流れを汲むものとがあったとして二つに類別するのは Flori, J., “Une ou plusieurs <première croisade> ?”, *op.cit.*, pp.3-27, Flori, J., “Faut-il rehabiler Pierre l'Ermite ? (Une réévaluation des sources de la première croisade)”, *Cahiers de Civilization Médiévale*, Vol.38, 1995, pp.35-54. ピエールを高く持ち上げるドイツ系の年代記の伝統がウルバヌスのアピールが届きにくかった地域で生まれたことは間違いない。これについてはCoupe, M.D., “Peter the Hermit : A Reassessment”, *Nottingham Medieval Studies*, Vol.31, 1987, pp.37-45.
- (24) Liebeschütz, H., “The Crusading Movement”, *op.cit.*, p.270, Flori, J., “Une ou plusieurs <première croisade> ?”, *ibid.*
- (25) Parisse, M., “Les effets de l'appel d' Urban II à la croisade aux marges impériales de la France”, in : *Le concile de Clermont de 1095 et l'appel à la croisade*, *op.cit.*, pp.214-215.

- (26) Bull, M., "The Roots of Lay Enthusiasm for the First Crusade", *History*, Vol.78, 1993, p.363.
- (27) Golb, N., *The Jews in Medieval Normandy*, *op.cit.*, pp.547-550(Appendix I : *The Chronicle concerning Jacob B. Jequithiel of Rouen*).
- (28) 前掲拙稿、62-63ページ。
- (29) 佐藤唯行『英国ユダヤ人：共生をめざした流転の民の苦闘』講談社、1995年、21ページ。
- (30) Golb, N., *The Jews in Medieval Normandy*, *op.cit.*, p.114.
- (31) Linder, A., ed., *The Jews in the Legal Sources of the Early Middle Ages*, Wayne University Press, 1997, p.558.
- (32) Golb, N., *op.cit.*, p.115.
- (33) Taiz, E., *The Jews of Medieval France : The Community of Champagne*, Greenwood, 1994, pp.61-69.
- (34) Taiz, E., *ibid.*, p.64.
- (35) Taiz, E., *ibid.*, p.74.
- (36) Taiz, E., *ibid.*, pp.75-77.
- (37) Taiz, E., *ibid.*, p.84.
- (38) Taiz, E., *ibid.*, p.86.
- (39) 前掲拙稿、47-48ページ。
- (40) Taiz, E., *op.cit.*, p.88.
- (41) Glaber, R., *The Five Books of the Histories* (edited and translated by J.France), Clarendon, 1989, pp.133-137.
- (42) Abulafia, S.A., "An Eleventh-Century Exchange of Letters between a Christian and a Jew", *Journal of Medieval History*, Vol.7, 1981, rep in: *Christians and Jews in Dispute*, *op.cit.*, III, p.155.
- (43) Stow, K.R., *Alienated Minority: The Jews of Medieval Latin Europe*, Harvard University Press, 1994, pp.94-95, Abulafia, S.A., *ibid.*
- (44) Taiz, E., *op.cit.*, p.88.
- (45) The Chronicle of Albert of Aachen, in : Peters, E., ed., *op.cit.*, p.104.
- (46) The Chronicle of Albert of Aachen, *ibid.*, p.105.
- (47) Guibert de Nogent, *Geste de Dieu par les Francs*, *op.cit.*, p.87, n.41, S.ランシマン『十字軍の歴史』河出書房新社、1989年、90ページ。
- (48) Solomon bar Simson, *op.cit.*, p.22,23,33. Eliezer bar Nathanの年代記では、マインツの死者は一日で1,300人となっている。Eliezer bar Nathan, *op.cit.*, p.83.
- (49) The Chronicle of Albert of Aachen, in : Peters, E., ed., *op.cit.*, pp.110-111.
- (50) Solomon bar Simson, *op.cit.*, p.53, Eliezer bar Nathan, *op.cit.*, p.87.
- (51) ちなみに、ドナウ川へと向かった民衆十字軍はその後、つぎのような動きを見せた。6月か7月の頃、Guatier sans Avoirの先遣隊もピエール本隊もハンガリーとブルガリアの国境のあたりでいくつかの町や村を略奪し、

逆に民衆や軍隊から手痛い反撃を受け、少なからぬ人員を失った。Peters, E., ed., *op.cit.*, p.106-107. 一方、エミコ軍はハンガリー国王から領内通過の許可を得ることができずに、強行突破を試みたが、ハンガリー軍の反攻に合い、ほとんど壊滅した。エミコは敗走し、レーニンゲンの領地に逃げ帰ったが、マインツからエミコと行動をとともにしてきたフランスの騎士はギリシャ方面に逃れ、フランス国王の弟Hugh de Vermondoisの十字軍に吸収された後、あらためて海路コンスタンティノーブルに向かった。Peters, E., ed., *ibid.*, p.111,160, 162.

- (52) ドイツからはエミコ軍だけではなく、ドイツ人の説教師Gottschalkが率いる一団もエルサレムをめざした。しかし、一行はレーゲンスブルク(Regensburg)で5月下旬にユダヤ人コミュニティのほとんど全員を強制改宗させるといふ暴挙に出た。十字軍は市民と一緒にあって、多くのユダヤ人を川に投げ込み、一斉に洗礼をほどこしたのである。Solomon bar Simson, *op.cit.*, p.67. 彼らはラティスボン(Ratisbon)でも、改宗に従わないユダヤ人を殺害した。Eidelberg, S., *op.cit.*, p.5. 一方、プラハでは6月末に、ラインラントから進軍してきた司祭Volkmarの指揮のもとで、サクソン人とボヘミア人からなる一団がユダヤ人を攻撃した。Riley-Smith, J., "The First Crusade and the Jews", in: Sheils, W.J., ed., *Persecution and Toleration*, Basil Blackwell, 1984, p.52. これらの軍団もハンガリー領内に入ると、略奪をはたらき、ハンガリー人の報復に合い、潰滅した。The Chronicle of Albert of Aachen, in: Peters, E., ed., *ibid.*, p.139-140, The Chronicle of Ekkhard of Aura, in: Peters, E., ed., *ibid.*, p.140. エミコ軍が国王に警戒され、追い返されたのは、その前にこのようなことが起きていたからである。S.ランシマン、前掲書、120-122ページ。

- (53) Solomon bar Simson, *op.cit.*, p.62.
 (54) Peters, E., ed., *op.cit.*, p.57, n.6.
 (55) Richard, J., *Histoire des croisades*, *op.cit.*, p.42.
 (56) Solomon bar Simson, *op.cit.*, pp.24-25.
 (57) Solomon bar Simson, *ibid.*, p.22.
 (58) Solomon bar Simson, *ibid.*, p.25.
 (59) Solomon bar Simson, *ibid.*, p.26.
 (60) Mainz Anonymous, *op.cit.*, p.100.
 (61) Mainz Anonymous, *ibid.*, p.108.
 (62) 註(12)参照。
 (63) Riley-Smith, J., *The First Crusade and the Jews*, *op.cit.*, p.66.
 (64) Riley-Smith, J., *ibid.*, pp.67-69.
 (65) The Chronicle of Ekkhard of Aura, in: Peters, E., *op.cit.*, p.112.
 (66) Solomon bar Simson, *op.cit.*, p.28.
 (67) The Chronicle of Ekkhard of Aura, in: Peters, E., *b.*, p.112.
 (68) Andre Vauchezは、11世紀が一般に終末論そのものの発展はあまり見られ

なかった時代であったとして、十字軍と終末論の結びつきを過大に考えることを戒めている。しかし他方で、世界の終わりに対する不安と希望の入り交じった雰囲気は当時の時代感情として認めうる。Vauchez, A., “Les composantes eschatologiques de l'idée de croisade”, in : *Le concile de Clermont de 1095 et l'appel à la croisade*, *op.cit.*, pp.233-243. Bernard McGinn も同様の見解を示し、黙示録が十字軍を駆り立てたというより、十字軍が黙示録復活の刺激となったというべきであると論じる。McGinn, B., *Vision of the End : Apocalyptic Traditions in the Middle Ages*, Columbia University Press, 1979, pp.88-89.

(69) Benzo of Alba, *Panegyrikus*, in : McGinn, B., *ibid.*, pp.90-91.

(70) Glick, L.B., *Abraham's Heirs : Jews and Christians in Medieval Europe*, Syracuse University Press, 1999, p.96.

なお、ここでは詳述しないが、迫害を受けたユダヤ人の側にも、受難はメシア到来の前触れにちがいないという思いがあった。メシアによる救済の希望はEliezer bar Nathanの年代記の全編にみながっているし、それは迫害の知らせを聞いたコンスタンティノーブル以東のユダヤ人社会にも膨らんだのであった。Prawer, J., *The History of the Jews in the Latin Kingdom of Jerusalem*, Clarendon, 1988, pp.9-13.

(71) また、やや後の時代に属するが、キリスト教社会が一般にムスリムとユダヤ人を「キリスト殺し」の行為者として混同していたことを論証する研究もある。Cutler, A.H., H.E. Cutler, *The Jew as Ally of the Muslim : Medieval Roots of Anti-Semitism*, University of Notre Dame Press, 1986, pp.97-120.

(72) Solomon bar Simson, *op.cit.*, p.22, Eliezer bar Nathan, *op.cit.*, p.80, Mainz Anonymous, *op.cit.*, p.101.

(73) Solomon bar Simson, *ibid.*, p.23, Eliezer bar Nathan, *ibid.*, p.81, Mainz Anonymous, *ibid.*, pp.101-102, p.105.

(74) Solomon bar Simson, *ibid.*, p.24, pp.27-30, p.45, Mainz Anonymous, *ibid.*, pp.106-107.

(75) Solomon bar Simson, *ibid.*, pp.49-50, Eliezer bar Nathan, *op.cit.*, pp.85-86.

(76) Solomon bar Simson, *ibid.*, p.51, 53, 57, pp.58-59, Eliezer bar Nathan, *ibid.*, p.87, pp.88-89.

(77) Solomon bar Simson, *ibid.*, pp.63-66.

(78) Solomon bar Simson, *ibid.*, p.25.

(79) Solomon bar Simson, *ibid.*, p.71.

(80) Stow, K.R., *Alienated Minority*, *op.cit.*, pp.98-99.

(81) 前掲拙稿、52ページ。

(82) Coupe, M.D., “Peter the Hermit: A Reassessment”, *op.cit.*, pp.41-42, Flori, J., “Une ou plusieurs <première croisade>?”, *op.cit.*, p.6.

(83) Solomon bar Simson, *op.cit.*, p.71.

- (84) Chazan, R., *European Jewry and the First Crusade*, University of California Press, 1996, pp.16-25.
- (85) Mainz Anonymous, *op.cit.*, p.100.
- (86) Stow, K.R., *Alienated Minority*, *op.cit.*, p.101,275.
- (87) フランス国王の態度は、14世紀初めのPhilip 4 世以降、決定的に反ユダヤ主義的なものとなる。Jordan,W.C., "Home Again : The Jews in the Kingdom of France, 1315-1322", in : Akehurst, F.R.P., et als, eds., *The Stranger in Medieval Society*, University of Minnesota Press, 1997, pp.27-45.
- (88) Chazan, R., *European Jewry and the First Crusade*, *op.cit.*, p.137.
- (89) Eidelberg, S., *The Jews and the Crusaders*, *op.cit.*, p.158, n.215.
- (90) Glick, L.B., *Abraham's Heirs*, *op.cit.*, p.104.